臨床実習における教育方法に関する一考察

——指導者の理想像アンケート調査より——

*Discussing Methods of Education during Clinical Training: Results of a Questionnaire
Survey on Views of an Ideal Supervisor*

吉村 修¹⁾ 二宮 省悟²⁾ 楠元 正順¹⁾ 吉田 勇一²⁾ 濱田 輝一²⁾

OSAMU YOSHIMURA, RPT¹⁾, SHOGO NINOMIYA, RPT, PhD²⁾, MASAZUMI KUSUMOTO, RPT¹⁾,
YUICHI YOSHIDA, RPT²⁾, TERUKAZU HAMADA, RPT²⁾

¹⁾ Kawasaki Hospital: 538 Tsunoe, Yame-shi, Fukuoka 834-0024, Japan TEL +81 943-23-3351 E-mail: osayoshi036@gmail.com

²⁾ Department of Physical Therapy, Faculty of Nursing and Welfare, Kyushu University of Nursing and Social Welfare

Rigakuryoho Kagaku 33(4): 587-590, 2018. Submitted Jan. 19, 2018. Accepted Mar. 8, 2018.

ABSTRACT: [Purpose] With the aim of improving physical therapist education, clinical training supervisors' views of an ideal supervisor and differences in such views related to the length of clinical experience were examined. [Subjects and Methods] A questionnaire survey was conducted, asking physical therapists working in 42 facilities to voluntarily respond. [Results] The 5 most frequent words were "student", "supervision", "can", "training", and "ability". Furthermore, responses were classified into 3 clusters: <conveying the enjoyment of clinical practice>, <being able to supervise students according to their abilities>, and <considering appropriate approaches for individual patients together>. When focusing on the length of clinical experience, differences were observed in 5 words: "student", "thinking", "enjoyable", "according", and "together". [Conclusion] Clarifying and understanding views of an ideal supervisor may contribute to the improvement of physical therapist education. This may also be needed to enhance physical therapists' qualities.

Key words: physical therapist education, clinical training supervisors, views of an ideal supervisor

要旨:〔目的〕より良い理学療法士教育の構築を目指して、臨床実習指導者（以下、指導者）が考える指導者の理想像および臨床経験年数での理想像の違いの有無の把握を目的とした。〔対象と方法〕42施設の理学療法士を対象とし、任意に回答要請し、質問紙調査を行った。〔結果〕上位5番目までの頻出語が「学生」、「指導」、「できる」、「実習」、「能力」であった。「臨床の楽しさを伝える」、「能力に合わせた学生指導ができる」、「患者のことを一緒に考える」の3つのクラスターに分類された。臨床経験年数での違いは、「学生」、「考える」、「楽しい」、「合わせる」、「一緒に」の5語で差を認めた。〔結語〕指導者の理想像を検討して理解することは、より良い理学療法士教育に役立ち、理学療法士の質の向上に必要であると考えられる。

キーワード: 理学療法教育、臨床実習指導者、理想像

¹⁾ 医療法人社団慶仁会川崎病院：福岡県八女市津江538（〒834-0024）TEL 0943-23-3351

²⁾ 九州看護福祉大学 看護福祉学部 リハビリテーション学科

I. はじめに

臨床実習は、実際の症例と現場に関わることで養成施設で習得した知識や技術、医療専門職としての態度を合わせた総合的実践力を養うものである。近年、理学療法士数の急激な増加および理学療法士の質の低下が懸念されている^{1,2)}。全国の入学定員数が1万3千人を超え、臨床実習施設や臨床実習指導者（以下、指導者）の確保も急務といえる。この状況下、臨床経験が少ないまま指導者を担うこともあり、指導者自身が学生時代に受けた臨床実習指導や職場内での経験に基づく指導を行うことも多い。柴田³⁾は今の学生は、以前のように明確な目的意識を持った者ばかりでないと述べている。

日本理学療法士協会は、養成校数の激増に加え、これまでの専門学校養成以外に学士取得を目標とする大学での課程設置が増えてきたことも影響し、これまで以上に学生の学力や資質面、そして理学療法学に対する取り組み姿勢に格差が認められるようになったと指摘し、学生を画一的な凡例をもとに捉えることはもはや不可能であり、学生一人一人を理解していかなければ、臨床実習教育は成立しないと述べている⁴⁾。理学療法士の質の向上の取り組みの一つには、臨床実習における指導者が行う学生に対する教育の質の向上が必要と考える。理学療法士の卒前教育である臨床実習において、より良い教育には理想とする指標や特性を明らかにする必要があると考える。これまで指導者の理想像について選択肢でなく、詳細がわかる自由記載を利用した研究は少ない。

本研究の目的は、より良い理学療法士教育の構築を目指して、指導者が考える指導者の理想像および臨床経験年数での理想像の違いを把握することである。

II. 対象と方法

1. 対象

対象は、アンケートにご協力いただいた九州地方の42施設（表1）の理学療法士を対象とした。ヘルシンキ宣言に基づき、調査対象施設に対して、口頭および文書にて研究主旨を十分説明し、同意を得て調査を行った。なお、本研究調査は所属の倫理委員会の承認を得て

行った（承認番号：2000）。

2. 方法

任意に回答要請し、無記名の質問紙調査を行った。調査期間は平成25年8月から平成26年3月までの8ヵ月間とした。調査については、各施設のリハビリテーション部門の代表者へ調査目的、方法を記載した依頼文書と口頭にて十分説明を行った。回答をもって調査への同意とした。社会的望ましき尺度⁴⁾を使用して歪められた傾向のある回答を除外する事前処理を行った。設問内容を「理想とする臨床実習指導者像を具体的にご記入ください」として、自由記載法にて得られた回答について調査・分析を行った。

回答はテキスト形式にデータ化し、樋口らの開発したフリーソフトウェア KH Coder を利用して、テキストマイニングの手法を用いて、頻出語抽出および頻出語における性質を把握するために階層クラスター分析（Ward's Method, 出現回数30回以上の語を対象）を行った。臨床経験年数を0～5年目（A群）、6～10年目（B群）、11～15年目（C群）、16年目以上（D群）に分類し、全体での頻出語の出現回数30回以上の13語を対象とし、各群における頻出語の割合を比較するために χ^2 検定を行った。期待度数が0になるセルがある場合、もしくは期待度数が5未満になるセルが全体の20%を超える場合には、フィッシャーの正確確率検定を実施した。さらに、有意差を認めた項目には残差分析を行った。統計処理はR3.3.3を使用し、有意水準5%とした。

III. 結果

回答数は790名、有効回答数は689名（87.2%）であった。そのうち、臨床実習指導の経験がある479名を分析対象とした。分析対象には、臨床経験年数が3年未満でも実習中に学生へのアドバイス経験があると回答した者も含めた。テキストマイニングにより、全体で7660語が抽出された。頻出150語を抽出した結果、上位5番目までの頻出語が「学生」、「指導」、「できる」、「実習」、「能力」であった（表2）。

階層クラスター分析の結果、「臨床の楽しさを伝える」、「能力に合わせた学生指導ができる」、「患者のことを一緒に考える」の3つのクラスターに分類された（図1）。臨床経験年数はA群181名、B群164名、C群80名、D群54名に分類され、 χ^2 検定の結果、「学生」（ $p<0.01$ ）、「考える」（ $p<0.01$ ）、「楽しい」（ $p=0.0187$ ）、「合わせる」（ $p<0.01$ ）、「一緒」（ $p<0.01$ ）の5語で差を認めた。

残差分析の結果、「学生」は、B群で有意に少なく、D群で有意に多かった。「考える」は、A群で有意に多く、C群で有意に少なかった。「楽しい」は、D群で有意に少なかった。A群で有意差は認められなかったが比較的

表1 調査対象施設の基本属性

施設の形態	施設数
総合病院	6
一般病院（上記以外）一般病床	14
一般病院（上記以外）療養型病床	8
一般病院（上記以外）一般病床、療養型病床	5
その他	3
記載なし	6

表2 頻出語（全体）上位60語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
学生	292	考え	24	行える	17	興味	11
指導	223	知識	24	コミュニケーション	16	経験	11
できる	67	持つ	23	意見	16	考え方	11
実習	64	自分	23	引き出す	16	合う	10
能力	61	行う	22	応じる	16	自身	10
臨床	55	わかる	22	目標	16	理解	10
患者	50	治療	21	説明	15	感じる	9
人	49	把握	21	的確	14	気づく	9
伝える	47	技術	19	社会	13	姿勢	9
考える	39	適切	19	理学	13	責任	9
楽しい	38	評価	19	療法	13	必要	9
合わせる	33	レベル	18	アドバイス	12	押し付ける	8
一緒	31	教える	18	引き出せる	12	見せる	8
成長	27	思う	18	質問	12	仕事	8
学ぶ	24	導く	18	問題	12	設定	8

高い値を示した ($p=0.0725$)。「合わせる」は、A群とD群で有意に少なく、B群とC群で有意に多かった。「一緒」は、A群で有意に多く、B群とD群で有意に少なかった。

IV. 考 察

本研究では、より良い理学療法士教育の構築を目指して、指導者が考える指導者の理想像および臨床経験年数での理想像の違いを把握するため、調査を行った。今回の調査の結果、指導者は、「臨床の楽しさを伝える指導者」、「能力に合わせた学生指導ができる指導者」、「患者のことを一緒に考える指導者」を理想像と考えていた。日本理学療法士協会も、指導者の役割として実習学生の知的好奇心を呼び覚まし、自己学習を促すよう働きかけを行うことを重要視しており⁹⁾、本研究結果とほぼ同様の見解を述べている。

「臨床の楽しさを伝える指導者」となるためには、指導者自身が日々の臨床業務で感じる楽しさを言葉や態度で伝えることが大切である。また、楽しさを伝えるためには学生の興味を把握することも必要であると考え、諸橋⁵⁾は学生の強みやよいところを引き出し、人の成長を支援することが指導者として大切な資質であり、学生に面白さや感動場面を演出し、学生の自己肯定感をより高め、その指導過程のなかで学生を成長させ、なおかつ指導者自身も成長できることが望ましいと述べている。したがって、指導者は学生とコミュニケーションを積極的にとり、学生のモチベーションを高める対応が必要であると考え、

「能力に合わせた学生指導ができる指導者」となるためには、教育者という自覚を持ち、学生理解を深め、個

図1 階層クラスター分析

別性を考え学生に合わせた指導を行うことが必要である。教育学的な知識や指導方法に関する知識の修得のための学習や研修会などへの参加で指導者としてのスキルの向上に努めることが求められると考える。木村⁶⁾は、臨床実習の指導のあり方の多くは、指導者個々の価値観や経験則に基づいた実習指導として行われているのが実情のように思われると報告している。また、小林⁷⁾は指導者に共通する課題として、具体的な指導方法の未確

表3 頻出語（臨床経験年数別）上位15語

	0～5年	6～10年	11～15年	16年以上
1位	学生	学生	学生	学生
2位	指導	指導	指導	指導
3位	できる	能力	できる	患者
4位	人	実習	実習	できる
5位	一緒	患者	臨床	人
6位	考える	臨床	能力	実習
7位	楽しい	できる	伝える	臨床
8位	実習	伝える	楽しい	能力
9位	臨床	合わせる	合わせる	導く
10位	伝える	人	患者	伝える
11位	能力	考える	考え	治療
12位	患者	楽しい	人	一緒
13位	合わせる	一緒	一緒	考える
14位	考え	考え	考える	楽しい
15位	導く	導く	導く	合わせる

立や経験則による指導内容を提起しており、経験的な指導方法に加えて、教育学的な視点を持ち、個性性に合わせた指導が求められると推測された。

「患者のことを一緒に考える指導者」となるためには、学生がわからないことがあった場合に学生と一緒に考えたり、ヒントを与えたり、または調べる方法を確認しながら、問題解決方法を示す必要がある。日本理学療法士協会は、実習中の疑問点を素直に指導者に相談できる環境作りと、それらを解決すべく教育的・指導的姿勢をもって学生に接することが指導者には必要であると述べている⁹⁾。奈良⁸⁾は、学生が実習中に脱落する理由の多くは指導者との人間関係トラブルであると指摘している。さらに、杉本⁹⁾は、良好な人間関係を構築していくためには、指導者からいま一歩歩み寄った指導が必要だと報告している。したがって、学生と一緒に考えるためには、指導者と学生の良い関係性の構築が重要であるといえる。

臨床経験年数による理想像の差が5語で認められたことより、臨床経験年数により相違した部分が存在することが示された。経験年数が少ない層（A群）では、「考える」、「一緒」が有意に高く、学生と同じような視点で問題を解決することを理想としていることが考えられる。また、有意差は認められなかったが、「楽しさ」も高い傾向であった。クラスター分析の結果と同様に、臨床の楽しさを伝える指導者を理想としていることも考えられた。中堅層（B群、C群）では、「合わせる」が有意に高く、学生を十分把握したうえで能力に応じた指導を理想としていることが示唆された。ベテラン層（D群）では、「学生」が有意に高かった。回答の文面から、「学生の能力把握」、「学生の成長」という表現が多く、学生のことを把握し、成長させる指導者を理想としているこ

とが推察された。今回の結果から、臨床経験年数別の理想像の差を捉えたことで、指導者の特徴をより詳しく分析することができた。

実習中、学生は指導者の姿から様々なことを学んでいる。言葉遣いや対象者への説明方法、姿勢や態度など指導者自身が学生から評価されていることにも気づかなければならない。学生から指導者自身が理学療法士の理想像として思ってもらえるように理学療法士かつ指導者として内省し、共に成長する意識が必要であり、適切な指導ができる指導者になるための自己研鑽を行うべきである。また、指導者は学生を指導することと同時に養成校と積極的な連携をとり、ともに理学療法士を育成していることに責任を持つことが求められる。一方、実習施設や指導者によっては、指導内容や質などが異なり、学生が得られるものに相違が生じる場合がある。そのため、指導者は共通した認識、態度で指導を行うべきである。

本研究の限界として、一部地域の理学療法士を対象とした調査であり、全国傾向に関する言及が困難であることが挙げられる。今後は、全国の理学療法士を対象とした調査が必要と考える。また、理想像に関する継続した意識調査を行うことで、指導者の在り方を確立していく必要がある。

本論文の一部を第52回日本理学療法学会大会2017の発表で用いた。

利益相反 本研究において開示すべき利益相反はない。

謝辞 本研究の実施にあたり、質問紙調査にご協力頂いた皆様に深謝いたします。

引用文献

- 1) 社団法人日本理学療法士協会：臨床実習教育の手引き、第5版。日本理学療法士協会、東京、2007、pp8-16.
- 2) 中本隆幸：臨床実習指導者が考えておくこと。理学療法京都、2014、43：82-91.
- 3) 柴田拓哉：臨床実習指導者に必要なスキル。理学療法京都、2013、42：18-21.
- 4) 北村俊則、鈴木忠治：社会的望ましき尺度 日本語版 Sosial Desirability Scaleについて。社会精神医学、1986、9：173-180.
- 5) 諸橋 勇：臨床実習指導におけるコーチングスキルの応用。理学療法科学、2011、38：397-401.
- 6) 木村貞治：臨床実習指導の要点。理学療法研究・長野、2012、40：34-43.
- 7) 小林 賢：臨床実習指導者からみた臨床実習教育の実態と展望。PTジャーナル、2014、48：481-486.
- 8) 奈良 勲：理学療法教育における臨床実習のあり方を問う。広大保健学ジャーナル、2004、4：1-5.
- 9) 杉本大貴：学生からみた臨床実習教育の実態と展望。PTジャーナル、2014、48：487-492.